

## 書 評・紹 介

デボラ・チェンバース、パブロ・グラシア (著)、永田夏来・松木洋人 (監訳)<sup>1)</sup>  
『家族生活と親密性の社会学——つながりの再編を捉えるための視点をひらく』  
春秋社, 2026年3月, 336ページ

「家族」とは、同居し、婚姻や血縁で結ばれた人びとのことだろうか。同棲カップル、同性パートナー、生活や子育てを支え合う友人は、「家族」ではないのだろうか。現代では、同居、婚姻、血縁、親密性が必ずしも重ならず、家族の境界は自明ではない。本書は、家族の多様化を衰退としてではなく、親密なつながりの再編と捉える家族社会学の概説書である。

第1章「家族への伝統的アプローチ」では、人類学、エンゲルス、パーソンズ、親族・コミュニティ研究、フェミニズム家族論などの系譜をたどり、男性稼ぎ主と女性主婦からなる白人中産階級の核家族を普遍的な家族形態とみなす見方を問い直す。また、同居世帯を越えて維持される親族関係や、家事・ケア労働のジェンダー間の偏りにも目を向ける。

第2章「個人化、親密性、家族生活」では、ギデنزの「純粋な関係性」やベックらの個人化論を取り上げる一方、これらが個人の選択可能性を強調し、ジェンダー、階級、人種・エスニシティ、性的指向などによる構造的制約を十分に捉えないと批判する。そのうえで、家族を日常生活のなかで「行う」ものとするモーガンの「家族実践」論と、関係を家族として周囲に示し、承認を得る過程に注目するフィンチの「家族ディスプレイ」論を紹介する。食事、連絡、送金、子どもの世話などの実践を通じて家族関係は形成・維持される。とりわけ同性カップルやステップファミリーは、自らの関係を家族として周囲に示すことがより一層求められるなど、家族の多様化は、社会的承認を得るための労力を伴う場合がある。

第3～8章は、子育て、子ども期、高齢化、グローバル化、出生力、生殖補助技術などを扱う。第9章では、婚姻や血縁に限らず、友人、同性パートナー、元配偶者、別居親族など、本人にとって意味を持つつながりに注目するスマートの「個人的生活」の議論が紹介される。

本書は、伝統的な家族形態を唯一の標準とはみなさず、家族が多様化しても親密性やコミットメントまで失われるわけではないことを示す点で、家族の変化を単なる衰退として理解する見方への有力な反論となっている。

本書が主に扱うのは、すでに形成された家族や親密関係が、いかに実践され、維持され、社会的に承認されるかという問題である。この議論を広げれば、誰がパートナーや親しい友人との関係を形成し、多様な親密関係を現実の選択肢として持ちうるのかが問われる。筒井 (2025)<sup>2)</sup> は、結婚や家族が個人の選択肢となるほど、関係の選択・形成・維持の責任も個人に委ねられると論じる。一方、そのための機会や資源は平等ではない。

本書は、標準的な家族像を相対化し、多様な家族生活と親密関係を体系的に整理している。さらに、その議論は、誰が親密な関係を形成できるのかという問いにも接続しうる。家族社会学を学ぶ読者のみならず、未婚化や少子化に関心を持つ人口学・社会政策分野の読者にとっても、有益な一冊であろう。

(鈴木 貴士)

1) 原著は Chambers, Deborah and Gracia, Pablo (2022) *A Sociology of Family Life: Change and Diversity in Intimate Relations*, 2nd ed., Cambridge, Polity. である。

2) 筒井淳也 (2025) 『人はなぜ結婚するのか——性愛・親子の変遷からパートナーシップまで』中央公論新社。